

2016年6月5日 主日礼拝説教（要旨）

聖書 ルカによる福音書 13章 22～30節

説教「狭い戸口から入りなさい」

日本キリスト教会鶴見教会牧師 高松牧人

ある人が主イエスに、「主よ、救われる者は少ないのでしょうか」と尋ねました。それに対して主イエスは「狭い戸口から入るように努めなさい」と語り始められました。けれども、一連の警告や勧めを通して、主イエスは先ほどの問いには全く答えてはられません。これは注目すべきことです。なぜなら、最初の問いは一見真面目な問いのようで、誰も興味を持つものなのですが、その問いは私たちの好奇心や評論家的な思いから生まれて来るもので、そこからは信仰の決断も新しい歩みも始まらないからです。主イエスは、救われる人が多いか少ないかをお答えにならず、ただ神の国への招きをお語りになっているのです。

「狭い戸口から入るように努めなさい。言っておくが、入ろうとしても入れない人が多いのだ」（24節）。ここで私たちは、マタイによる福音書 7章 13～14節に記されている「狭い門から入りなさい。滅びに通じる門は広く、その道も広々として、そこから入る者が多い。しかし、命に通じる門はなんと狭く、その道も細いことか」という御言葉を思い起こすことができるでしょう。ここをあの言葉と同じように読んでしまうかもしれません。しかし、注意してみるとマタイの教えとここでの教えの意味合いは少し違っています。使われている単語も違うのです。マタイは門であり、ここは扉です。そして、マタイでは門が狭いのは、それを見いだす者が少なく、皆が広い門広い道の方に行ってしまうからですが、ここでは、入るべき戸口は分かっているのだけれど、そこは狭いのでなかなか入れないから、入ることができるように努めなさいというのです。努めるとは、戦うとか奮闘するという言葉が使われています。

今、主イエスはエルサレムに向かっておられます。風に吹かれるように、気の向くままに旅しておられるのではありません。救い主として私たちのために苦しみを負うための歩みを、父なる神の御旨に従って歩んでおられるのです。罪の力に対して神の恵みが勝利するために戦っておられるのです。この主の戦いと勝利を知り、これに与かる私たちは、もう救われているのだと言って座り込んだり、他にどのくらいの人が救われるのかと見物したりするようなのんきなことはしてはいられません。心を尽くし、力を尽くして、主イエスのあとに従うほかないのです。パウロが言うように、「なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走る」（フィリピ 3：13～14）ほかありません。

主イエスは私たちに決断を促しておられます。「家の主人が立ち上がって、戸を閉めてしまってからでは、あなたが外に立って戸をたたき、『御主人様、開けてください』と言っても『お前たちがどこの者か知らない』という答えが返ってくるだけである」（25節）。この扉は開けっ放しではないのです。閉じられてしまう時が来ます。いったん閉

められてからでは遅いのです。最終的なタイムリミットは主イエスが再び来られる終わりの日ですが、私たちには肉体の死と言うタイムリミットもあることを忘れてはなりません。「ご主人様開けてください」との訴えの声は、油を用意していなかったために花婿を出迎えられなかった愚かな乙女たちの声に似ています（マタイ 25：1～13 参照）。主が帰って来られるその日その時を目覚めて待つ者たちでありたいものです。考えて見れば、時は迫っている、終わりの時は来ているとは、これまでも繰り返し語られてきたことです。

戸を閉じられた後、入りそびれた人々と主人とのやりとりがその後に記されています。「そのとき、あなたがたは、『一緒に食べたり飲んだりしましたし、また、わたしたちの広場でお教をうけたのです』と言い出すだろう。しかし主人は、『お前たちがこの者か知らない。不義を行う者ども、皆わたしから立ち去れ』と言うだろう」（26～27 節）とあります。信仰生活は過去の思い出に浸ることではありません。昔はどんなに熱心だったかと言いつつ、主イエスへの信仰の決断をしないで、狭い戸口から入っていこうとしなかったならば、やはり戸は閉じられてしまい、神の国に生きることはできないのです。

主なる神は全世界から神の民を集め、神の国の祝宴にあずかせてくださいます。イスラエルが御言葉への服従を頑なに拒むなら、後から招かれた異邦人が先に神の国の祝宴にあずかるという逆転現象も起こるのです（28～30 節）。

これらの御言葉を通して、主イエスは私たちを神の国に生きる者となるように招いておられます。厳しくも恵み深い招きです。正しく清い人間だけを招いておられるのではありません。罪深い者も、悲しみや嘆きを抱える者たちも招いておられるのです。ご自身の十字架の死によって私たちの罪を贖い、ご自身の復活にあずかる新しい命を私たちに与えようとしておられるのです。私たちを神の国に招き入れるために、主イエスはエルサレムへと歩み、十字架の死というまことに狭い、他の誰も入ることができないような苦しみの戸口を潜り抜けて天に挙げられ、そのことによって私たちが罪赦されて神の国に入るための戸口を開いてくださいました。主イエスがこのように開いてくださり、私たちを招き入れてくださるこの狭い戸口から入って、神の国の祝宴に与かる者たちでありたいと思います。今や、恵みの時。今こそ救いの日です。神の招きの御声を聞く時、心を頑なにしてはなりません。救われる者は多いか少ないか、誰が救われるか救われないかではなく、この私に確かに注がれている主イエスのまなざしに素直に顔を上げて、応えていきたいものです。